

学生たちの旧発電所遺構整備ボランティア

The Maintenance of an old Hydroelectric Power Station in Shizuoka Prefecture
by Students Volunteers of Kanazawa Gakuin University

水 野 信 太 郎

MIZUNO, Shintaro

はじめに

本稿では平成10年（1998年）夏季休暇中の後半部にあたる8月25日（水）から同月27日（金）にかけての2泊3日間において、静岡県榛原郡（はいばらぐん）中川根町（なかかわねちょう）に現存するかつての水力発電所の遺構（図-1^{注1)}および図-2^{注2)}参照）を清掃する作業ボランティアに参加した学生たちの活動に関する事項を報告する。

当該建築物（写真-1参照）は明治41年（1908年）3月に着工^{注3)}して同43年（1910年）5月に竣工した切妻屋根（写真-2参照）総2階建（図-3^{注4)}並びに写真-3参照）の赤煉瓦建築である。本稿において“赤煉瓦建築”と記述する用語が意味する内容は、煉瓦造建築物の内、煉瓦を積んだ状態を外観にも見せる赤い色の意匠をもつ建築物である。このデザインは、世界的には必ずしも多数の事例が散見されるわけではなく、主流の建築様式とは言えない。しかし逆に日本近代においては特徴的とも言えるほど数多く実践された建築作品群である。したがって赤煉瓦建築は地球上で特殊な分布状況を示している特異な建築スタイルであると言える。

なお、それらの建築物と技術的には共通性があるため混同されがちな煉瓦の建築物も存在する。つまり構造体が煉瓦で積み上げられたものである点において何ら相違点はないものの、外装材料として煉瓦以外の石材ほかを用いている建築物も少なくない。これらは煉瓦造建築ではあるが、本稿で述べる“赤煉瓦建築”に含まれない。因みに外観に石を積み上げた“煉瓦造・外壁石積み建築”は世界中に広く見られるが、とりわけ良好で大きな石材を自国で得ることが容易な地中海に面したヨーロッパ諸国で発達した建築技術である。

発電所訪問の意義

ここに報告する煉瓦を積み上げて構築された歴史的な発電所と同発電所を中心とする産業ならびに交通関連の遺構が、中川根町地名（じな・ぢな）区に現存する点を認識させ広めたいとする目的で、シンポジウム「日本の技術史をみる眼」第17回、地名の産業遺産と地域文化^{注5)}が、平成10年（1998年）の秋9月26日（土）に開催された。そのシンポジウムでは、それら産業遺産の学術的な価値が高く評価された。

それとは別に同シンポジウムの企画が計画される段階で、金沢学院大学経営情報学部3年生

の男子5名、女子2名の学生と筆者の合計8名で、旧発電所外周の整備ボランティアに出かけようという意見がまとまった。と言うのも当時この建物の北側外壁面が、生い茂る蔦に覆われてしまい、建築物の保存には好ましくない状態であったからである。シンポジウムと同時に実施される旧地名発電所の見学会よりも早い時点で前もって、発電所の周囲をきちんと整備しておく必要性を、学生諸君ともども認めたためであった。

さらに当ボランティアへ参加した学生自身にとっては、この度の活動には次のような意義があったものと認められよう。

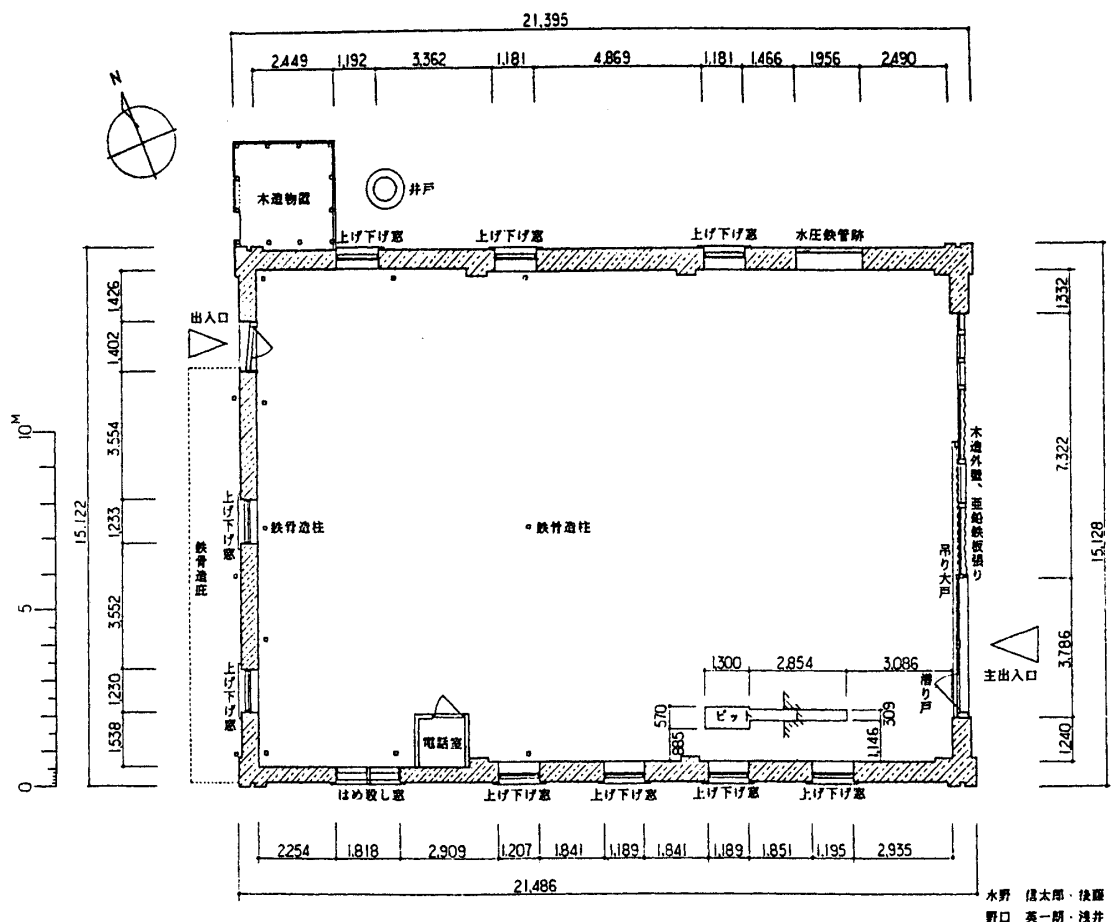
- ①歴史的な建築物に直接ふれる。特に日常生活からは縁遠い発電所という大規模な施設に触れる。しかも単に見学するだけでなく自らの全身を駆使して積極的に整備作業を行なう。
- ②まちづくりの一環への参加という学生時代には得難い貴重な体験を経験する。しかも今回の参加学生のほとんどが北陸など日本海側の出身者である。それらの学生にとって自分達の故郷とは大きく異なる風土や気候をもつ東海地方でのまちづくりに関与できる機会となった。
- ③自然が色濃く残る山間部の緑豊かな環境（自然遺産）と、その中に立地する産業・交通施設という旧発電所や鉄道（文化遺産）を同時に比較しながら実見する。
- ④静岡の製茶、愛知の自動車生産など、それぞれの県を代表する産業の現状も見聞きする。
- ⑤そして参加者全員のより深い親睦と友情を形づくる機会ともする。

本行程の全容

上記のような目的を満たすため当全旅程の中には、旧発電所以外の施設への訪問も組み入れることにした。金沢市末町の大学キャンパスを出発後、往路の途中に居住する学生を迎えに立ち寄り、その後は高速道路を利用。北陸自動車道の米原ジャンクションから名神高速道路の上り線に合流する。さらに東へ東へと進み、東名高速道路の相良牧ノ原（さがらまきのはら）インターチェンジを降りたところで、静岡県の人々と待ち合わせた。静岡県内における御案内を願った永井唐九郎氏と金沢学院大学経営情報学部産業情報学科水野研究室3年ゼミ生の1人・静岡県出身で帰省していた有ヶ谷（ありがや）晃広君の2名と合流し全員が顔を揃えた。

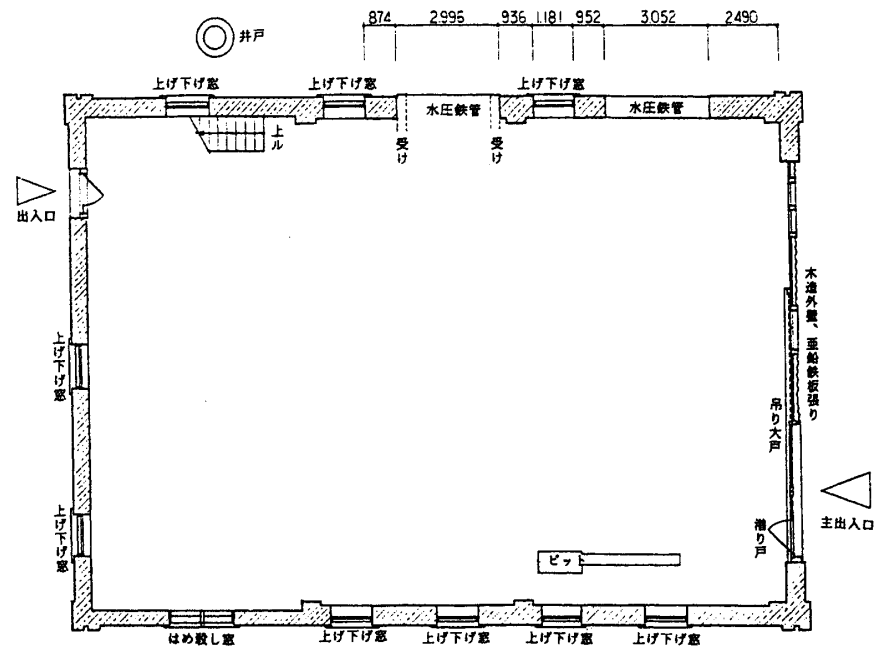
1日目の最初の訪問先は、煉瓦を積んで建物や煙突を築いた、地元の醸造業の歴史的な工場建築であった。そして2番目に訪ねたのは、静岡県の名産である緑茶の関連施設である。この場所において、お茶の製造体験をした。初日の宿泊先は、静岡県金谷町の相当に高い丘陵地の頂であった。夕刻たそがれ時の光景、夜更けの夜景、明朝に明るくなつてからの眺望と、いずれも素晴らしい宿泊施設であった。市街地からは距離的に少し離れた場所に位置していたため学生諸君は施設内で互いの親睦を深める時間を充分にもつことが出来た。

第2日目の午前中は静岡県で志渡呂（しとろ）焼きとして知られる窯元に依頼して陶芸作品の制作を体験（写真-4及び写真-5参照）した。各自の作品は、乾燥を終えた後に、窯元にて焼き上げ、静岡県内の御案内をすべて引き受けて下さった永井氏の手を経て、後日、名古屋へ出張した際の筆者・水野に手渡されて、金沢へ届けられる事となった。



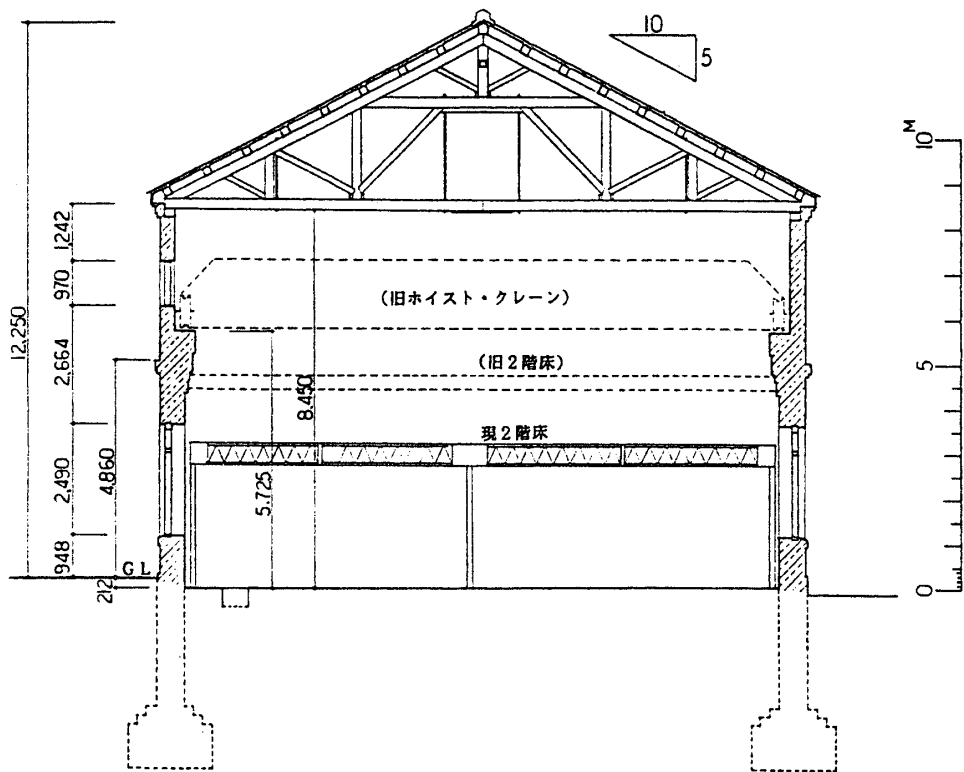
水野 信太郎・後藤 晋代
野口 英一朗・浅井 恵子 ©

図一 地名発電所1階現状平面



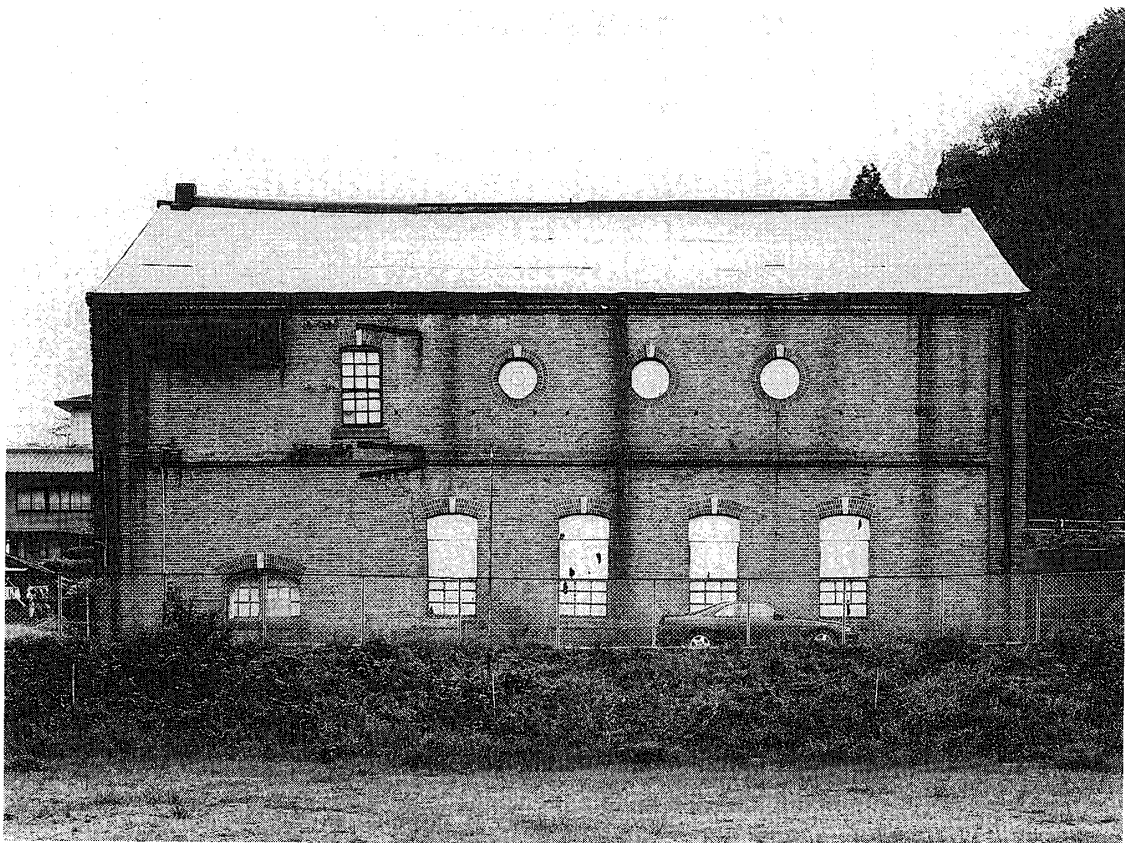
水野 信太郎・後藤 晋代
野口 英一朗・浅井 恵子 ©

図二 地名発電所1階復原平面



水野 信太郎・後藤 育代
野口 英一朗・浅井 恵子 ©

図一 3 現状横断面（一部復原）



写真一 1 旧地名発電所南側立面

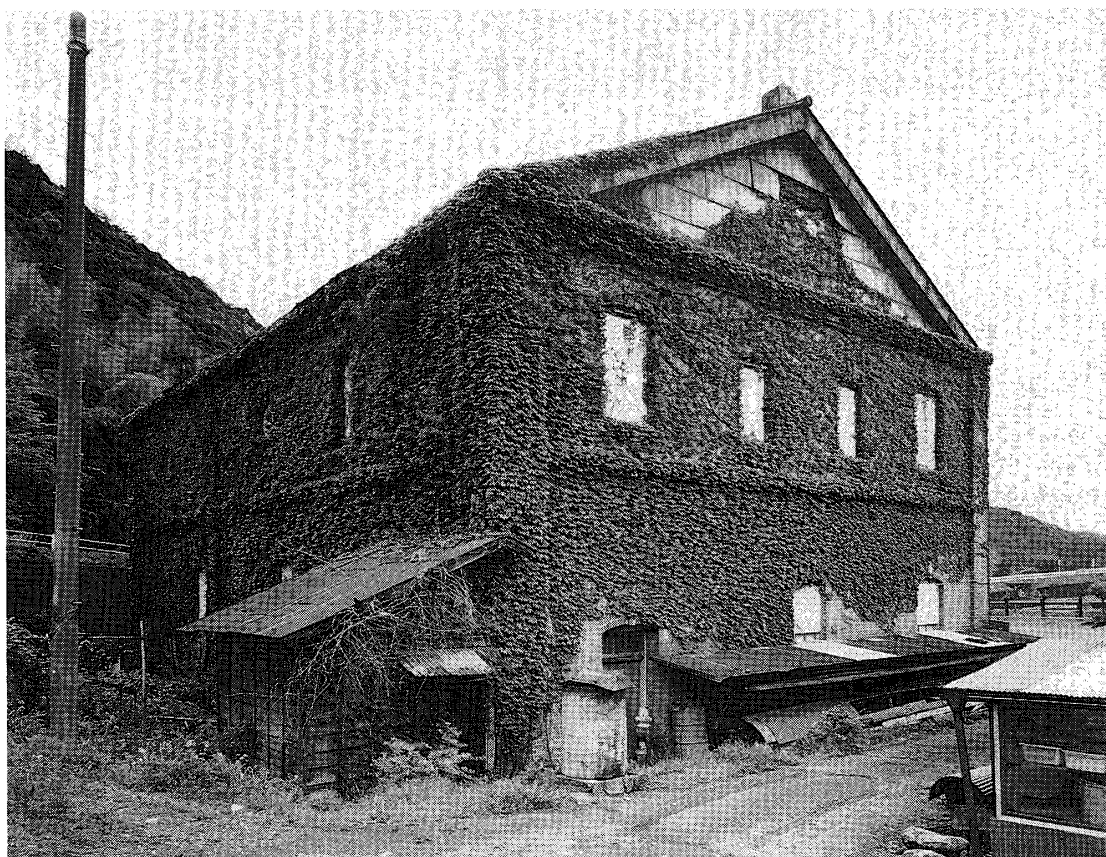


写真-2 同発電所北および西面



写真-3 室内東方向（出入口）

第2日の昼前から、今回の中心的活動である旧地名発電所建物の北側煉瓦外壁に生い茂った蔦の刈り取りボランティア作業を実施した。昼食は同発電所跡でとった。清掃作業が完了した直後に、全員で入浴をすることになり、近くに新設された温泉施設へと向かう。その夜の宿は愛知県豊川市であったため、静岡県をあとにして西の方角へ戻った。豊川市内中心部（豊川稲荷近傍）の旅館は、規模としても建築年代としても興味をひかれる宿舎であった。なお当該宿泊所においては現在、北海道浅井学園大学生涯学習研究所の研究員である野口英一朗氏にも同席していただくなど、学生達にとっては建築物を見つめる視点を御教示願う好機となった。

最終日の3日目は豊川市を出発して、愛知県長久手町に開設されているトヨタ博物館を訪問し、学芸員の西川氏自らによる案内と説明をいただくことが出来た。そして帰路は、往路とまったく逆の行程を西へ西へ、そして北へ北へと進み、無事に金沢へ到着した。

発電所跡と作業

紙面の制約から当該旧発電所の詳細を記述する余裕がない。このためボランティア活動を伝える写真を映像資料としながら、発電所の現状や特徴について触れておきたい。写真-6から写真-9までの4枚の写真に見られる通り、発電所跡北側に面して草木が茂る傾斜面が迫っている。写真-6では右手に、そして写真-9では反対の左側に向かって斜面がのびている。この斜めの大地に、かつて圧力鉄管と呼ばれる太い導水パイプが2本走っており、その中を駆け降りてくる大量の水が、煉瓦造の発電所内に据え付けられた2基のタービンを回していた。

写真-7と写真-8に示す通り、北側の傾斜面と煉瓦の外壁との間には、ほとんど空間がなくボランティア作業としては不自由な面もあった。また写真-7の左端には煉瓦の壁にアーチ型が見えるが、この部分が圧力鉄管の痕跡である。

参加者の声

続いて今回のボランティア活動に参加した学生たちのレポートを採録する。掲載する順序としては、経営情報学部産業情報学科の中で、A～Dのクラス順、同一のクラス内では名簿順とする。以下、紙面の許す範囲で参加者からの声を、可能な限り原文に忠実な形で掲載したい。

『旧地名発電所での草刈り』

産業情報学科3年A組37番 中西由美

去年の夏、8月25日。この日は静岡に出発する日だった。静岡は初めてだし、大学に入学してからは旅行らしい旅行もしないまま、3年生も半ばまで過ぎてしまっていたのでこの合宿は楽しみにしていた。出発時間が早いので私は大学まで行くことができず、途中、先生の車に拾ってもらうことになった。静岡に着いてから、お茶の葉っぱをもんで緑茶を作ってみたり、石臼で葉っぱをひいて抹茶を作ったりした。(このとき石臼の回し方が悪かったのか、親指の付け根の皮膚が剥がれて、メチャクチャ痛かった) おまけに、小魚を酢醤油で食べさせてもらい嬉しかった。

宿に着いてからも、明日は目的の旧地名発電所のツタ刈り掃除があるというのに、(水野ゼミは飲める人が多いと聞いていたけれども) みんな相当量のお酒を飲み、夜も遅くまで宴会状態が続いていたので自分自身も飲んでいながらもかかわらず、少々明日の作業に差し障りがあるのではないだろうか心配していた。(中略)

しとろ焼きの陶芸教室のときは頭が半分寝ているような状態で形をつくっていたせいか、途中で粘土が足りなくなり、急遽追加してもらった。作った直後はラーメンどんぶりのような大きさだった抹茶茶碗も、焼き上がってきて見るとそれほど大きくなかったので、良かった。

くねくねした山道を通り、静かな山村といったところに、煉瓦造りの大きな倉庫のような発電所の建物はあった。ただ、小雨が降っていたのでツタ刈りには向いていない天気だった。なんとなくヘビのいそうな藪を後ろに、壁からツタをはがしていくのだけれど思ったよりもツタが太くて、壁の隙間に入り込んでいてツタと一緒に壁が崩れそうだった。力まかせに引っ張って、ぶら下がって、やっとツタが取れたと思った時に、ツタに付いていた土がパラパラと落ちてきて顔にかかってしまった。かかっただけならまだいいが、私はコンタクトレンズをしているので少しでも眼にゴミが入ってしまうと、しばらくは何もできなくなるほど眼が痛い。私は眼をうるませて作業をしていた。

作業が終わり、みんなの姿を見してみると泥だらけで、『早く風呂に入りたい!』ということがありありとわかる格好だった。もうSLに乗ることはあきらめていた。そんな思いが伝わったのか、SLを変更して温泉に行くことになったのはとてもありがたかった。

以前から予定していた方の旅行に行くため、この旅行費用の工面がなかなかつかず、かなり迷った末の参加だったけれども、参加した意義はあった。行き帰りの車の中で先生から様々な話が聞けたこと、そして普段は門限があるためにパスしている飲み会で心おきなく飲めたこと、あまり話したことの無い人とも話をできたこと。またこのような旅行があったらぜひ参加したいと思う。
(1999.2.23受理)

『H10年度、夏のゼミ合宿に参加して』

産業情報学科3年B組53番 松橋陽子

1998年8月25日の朝8:00過ぎ、私達は夏の大雨の中、金沢学院大学2号館前を二台の車で出発した。私は水野先生の助手席に座り、地図を見ながら車のナビをすることになった。が、いい加減な地図の見方しか知らなかった私は、この合宿の最初から最後まで、何度となく運転手の水野先生をはじめ、後について来た車にも迷惑をかけてしまった。(中略)

話は変わって、この日私は生まれて初めて高速道路での渋滞というものを体験したのだが、「高速」とは名ばかりだ、と思える程に進まないスピードには、しびれを切らしてしまいそうだった。そんな高速での、やり場のない苛立ちを抑えつつ、ようやく高速を降りることが出来た。私達は地元案内人の永井さんと合流し、相良観光手もみ茶処「五月園」へ行き、第一日目の行事である「お茶の手揉み」を体験した。自分達で揉んだお茶と石うすでひいたお茶の粉、そしてワカメをお土産にいただいた。生のシラスの味まで体験させていただいた。出来たての

お茶は、味が少し薄めではあったけれど、ほのかに甘く、取れたての生シラスは、かなり濃厚な味で、その場の雰囲気も手伝ってか、どちらもすごく美味しかった。その後旅館「百楽園」へ行き、ゼミのメンバーみんなでお酒と御飯を楽しんで、今思うとなんであんなゲームをしたんだろうか・・・と思えるようなゲームをし、その後眠りについた。

26日、二日目。「彦次窯」にて志渡呂焼を体験し、その足で今回の合宿の一番の目的である「旧地名発電所の北側の蔦の根切り」^(ママ)に取り掛かった。晴れ間を見ながらの作業となった。今になって思うと、作業をするという目的がない限り、女の子はあまり足を踏み入れない方がいいのではなかろうか！？というような場所だったかもしれないが、その時の私は、気持ちも浮かれていて、やる気もあり、土にまみれながらも、さらには虫に刺されながらも、頑張っ蔦を壁から引き剥がしていた。手の届く範囲は“よくもここまで剥がしたもんだ”と言える程の形跡を残したのではないかと自負している。この後本当はSL急行に乗る予定だった。けれど、“温泉に行きたい！！”という全員の気持ちが一致したため、温泉へと直行し、さっきかいた汗を洗い流し、ようやくほっとしたのを覚えている。その日私達が向かった旅館「山月」には、先輩方の間で噂のあった野口さんが来られていた。みんなで夕飯を食べ、由美ちゃんと私は遅くまで座敷に残って、先生方の会話のじゃまをさせていただいた。私達の部屋のお風呂場はちょっぴり薄暗い感じだったので、怖さのためか、いつもより早くお風呂から出たことをよく覚えている。

27日、最終日。トヨタ博物館を見学した。高級車がずらりと並ぶ中を私達は好き好きに散らばって見学した。部品についてなど全く知らない私でも楽しく見てまわることが出来た。見学を終え、私達はファミリーレストランで昼食をとった。せっかく行ったのだから名古屋名物を見つけて食べておけばよかった、と今になって思ったりもする。

帰りの車の中は、疲れもあり、話題も尽きはじめ、最後は先生の口ずさむ歌をポーッと聴きながら私達は帰路についた。

今回のゼミ合宿に参加したことで、行ったらきっと楽しいだろうなあ、気候のいい所なんだろうなあ、と自分とはあまり関係のない所、ぐらいに思っていた土地に行く事が出来たことが、私の中では大きな成果の一つだった。そして、同じゼミのメンバーと一緒に一つのテーブルを囲んで御飯を食べたり、お酒を飲んだりしたこと、みんなで頑張っ蔦を壁から剥ぎ取ったことなど、学校とは違う空気の中で、体を動かして体験したことが、私の中では、この合宿での最大の成果だった。大学生活を振り返った時に、そういえばこんな事もしたなあ、と思いつけるような体験ができて、このゼミ合宿に参加して良かったと思える。—————楽しい体験と、思い出をありがとうございました。(1999.1.28受理)

『旧地名発電所の清掃作業』

産業情報学科3年C組 有ヶ谷晃広

1999年8月25日から僕は1泊2日で大井川町の地名発電所の草むしりのために清水の実家から向かった。水野先生をはじめ他の人たちは金沢からわざわざ静岡までやってきた。

他のメンバーと相良牧ノ原インターチェンジで合流することになっていたが、僕は現地に非常にはやく着いてしまって、お腹が痛くなってわざわざ山を下りてコンビニまで行ってトイレを借りてもう一度インターに戻ったが、まだ1時間くらいはあったと思う。本当に途方に暮れてしまった覚えがある。現地にいた先生の知り合いの方もなかなかはやく着いていて、顔は知らなかったがおそらくこの人だとにらんでいたら正解だった。

最初に向かったのは、醤油か何かの製造所だった。煉瓦づくりの工場でなかなか歴史を感じる建物だった。畑から建物を見物してなかなか怪しい集団だったに違いない。その後、一行はお茶の手揉みを体験するために小屋に行った。これがなかなか気分がいいものではなかった。8月の非常に蒸し暑い気候のなかエアコンが付いていない蒸し暑い小さな小屋に閉じこめられ、汗が噴き出してきて非常に気持ち悪かった。その後、宿に向かい、夕食を済ませ、風呂に入り、布団にはいった。1日目が終了した。夕食の時に飲んだ日本酒が相当おいしかった。

2日目、この日で僕はみんなよりも1日早く家に帰らせていただいた。朝から起こされ、ご飯を食べて、陶芸をする現場に向かった。朝だったのであまりここでのことは思い出せないが、現在、自宅に灰皿があるということはここで陶芸をしたということになる。しかし覚えていない。造ったことは覚えているがはっきりとは思い出せない。ここからこの旅のメインである旧地名発電所に向かった。すごい山の中で想像していたようなところだったが、そこにどーんと煉瓦の建物が建っていて不思議な感じだったが、何となく雰囲気があったような気がする。建物の裏側にツタや雑草がたっぷり茂っていてなかなか大変そうだった。じっさい作業にはいるとやっぱり大変だった。というより気持ち悪かった。ツタをめくったところや足元の雑草の中から何か見たこともない蛍光色の不思議な生物がうじゃうじゃ出てきた。これには鳥肌が立った。それでも、建物はなかなかきれいになり、小雨が降る中、作業は無事終了した。この作業の時も1日目の工場を見物したときと同様、なにも知らない地元の住民が見たら相当怪しかったに違いない。と、言うか、僕が地元の人だったら相当怪しんでいた。この後本当はSLに乗る予定だったが、汗をかき、雨に降られて予定は変更され温泉センターのようなところに向かうことになった。これは正直うれしかった。温泉センターで体はすっきりし、金谷駅まで送ってもらいみんなと別れた。この時どしゃ降りの雨だった覚えがある。

半年も前の話でなにも覚えていないと思っていたが、文章を書いているうちになかなかいろいろ思い出すことができた。印象に残っているのは、宿で松橋さんが持ってきてくれた新潟の日本酒が非常においしかったことと、ツタの下からでてきた不思議な生物のことが印象に残っている。あの生物は一体何だったのだろう。2つの煉瓦の建物も雰囲気があってよかったです。時間が経つと雰囲気が出る建物はやはり素敵だと思った。 (1999.1.20脱稿)

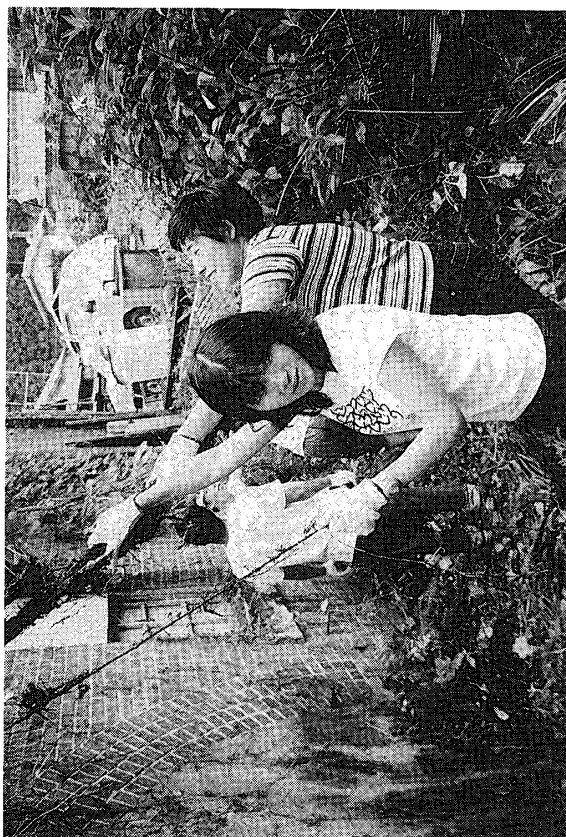
『地名発電所発電建屋清掃ツアー』

産業情報3年C組38番 中川忠志

僕たちは8月25日から8月27日まで地名発電所清掃ツアー通称J計画に出発した。僕はこのツアーのことを考えてわくわくしながら前日は、眠ることができなかった。25日は、学校から



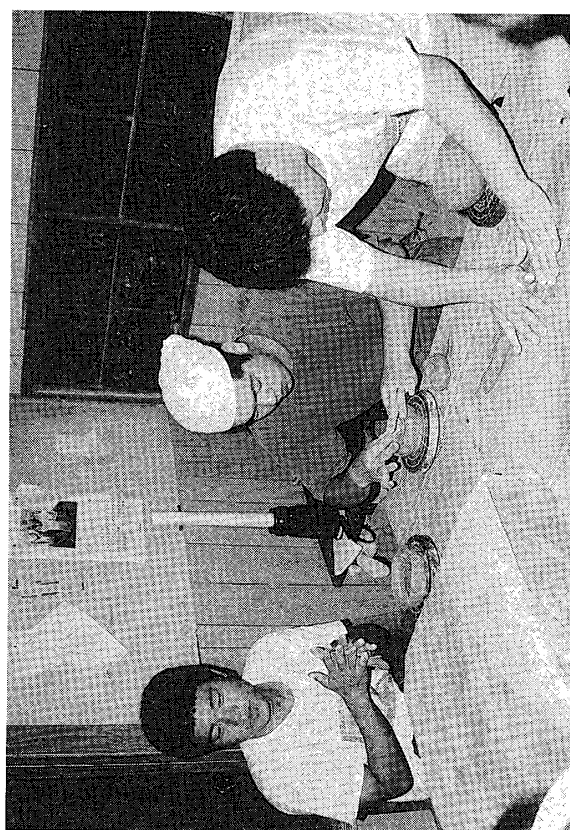
写真一6 清掃ボランティア開始



写真一7 ツタを取除く女子学生



写真一4 志渡呂焼きの陶芸指導



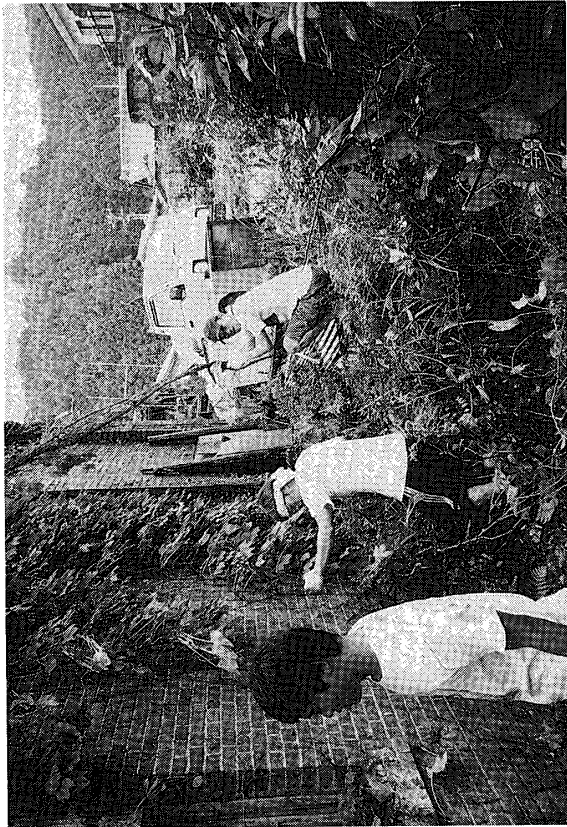
写真一5 陶芸指導後の創作風景



写真一10 シンポジウム見学会内



写真一11 シンポジウム発表会場



写真一8 男子学生達の分担作業



写真一9 刃物を用いた伐採工程

我々6名は出発したのだが、僕が一番驚いたのは水野先生の車のことだった。車は飛渡の車と水野先生の車の2台で行くことになっていたのだが水野先生の車はなんと軽自動車なのだ。静岡に行くのに軽自動車とは僕は水野先生の根性を見た。それから我々は北陸高速道にのり、いざ静岡へ出発した。さすがに静岡とあって距離は半端ではなかったが、途中サービスエリアで休憩をとりつつ、静岡へ着々とむかった。そして元々静岡出身の有ヶ谷と水野先生の後輩の永井唐九郎氏と東名相良牧ノ原出口で合流した。永井氏は何故かしら僕はさすが水野先生の後輩だと思わせる雰囲気があった。それから五月園というところで手揉み茶経験をした。お茶の葉は手揉みをしているときとてもいい匂いがした。この手揉みをしているとき永井さんは僕たちの写真を取りまくっていたのだが、その姿はまさに写真家のようにであった。その後、しらすを食べさせてもらったのだがこのうまさといったら絶品であった。僕はどちらかという手揉み茶よりもこのしらす食いの方が夢中になっていたような気がする。それからいねいにお礼を言って五月園をあとにした。その夜我々は旅館百楽園というところで宿泊した。その日一日の疲れをいやしながらみんなでお酒を飲みながらいろんな事を語り合った。みんないい感じで酔っていた。

2日目、我々は彦次窯で志渡呂焼創作体験をしてから、このツアーのメインイベントである地名発電所建屋清掃ツアーを行うことになった。まずなた、かま、のこぎりなどを手に持ち、細かいツタを切り、そのあと太いツタを切っていった。山ちゃんや窪田などは本当にその雰囲気にあっていた。何か野生人を思わせる働きぶりだった。手の届く範囲のツタを切り取り、地名発電所がみるみるきれいになったのを見て、とても爽快感をおぼえた。帰りにみんな景色の見渡せる銭湯にいった。いい汗をかいた後だったので、とても気持ちよかった。帰りの飛渡君の運転は眠そうで僕が眠れそうもなかったので、途中で代わり金沢まで運転した。このツアーでの経験は大学生活で初めてで、とても楽しい思い出になりました。このような経験をさせてもらって本当に水野先生ありがとうございました。(1999.2.25受理)

『夏季水野ゼミ「ツタ切り」ツアーを終えて』

産情3 D19番 窪田治男

去年の夏休み、我が水野ゼミ3年生5人は早朝から静岡にあるという赤煉瓦造の発電所がツタで痛むおそれがあるというので、半ばボランティア活動に近い旅行へと旅立つため金沢学院大学2号館前に集合していた。

しかし、予定時間になったが集合状況が悪い。ついには、一人連絡が取れないため先生の決断により置いていくことに…先行き不安な、出発である。

高速道路に入り、あとはもう寝るだけである。幸い？にも、僕は免許を持っているにもかかわらず完全な「ペーパードライバー」であり、運転を替わることは皆の命の安全のため残念ながら替わる事が出来ない。ここは、やはり前日の深夜のバイトで疲れた体を休めるに限るとばかりにひたすら眠っていた。もうこの際、「飛渡君の運転は怖いぞ」と友人から聞いた助言は忘れることにした。(中略)

さて、なんだかんだ言っても車を走らせているうちに目的地である静岡に到着し残る一人と合流し、(すでに金沢に一人置き去りにしたことはないものとする) お茶作りに向かう。

まずは、お茶の手揉みの仕方をビデオで見せてもらい、その後実際に自分たちでやってみるが、これがなかなか難しく綺麗にほぐれず苦労した。一見、簡単そうに見えるおじさんの動きが、自分でやるとなると上手くいかない。さすがに、熟練の技とでもいうべきか。それでも、それらしくほぐしていくうちにそれっぽくなってきた。お茶の、いい香りが広がり、満足感につつまれた頃、「シラス」(しらうおだったか、よく覚えていない) の躍り食いを体験させてもらった。これが、なかなかの美味でビールが欲しくなるような味である。もう、先生は喋りながらもばくばく食べていたところは先生らしいなあと、しみじみ感じた。過去の来訪者の写真の中に、お子さまに大人気の「ガチャピン」と「ムック」が来ていた写真があり、ちょっと想像して笑ってしまった。ひょっとしたら、昔TVで、「ガチャピン」のお茶作りを見ていたかも知れない。

翌日、この旅の最大の目的である「ツタ切り」に向かう。あいにくの雨模様だが、それでも時々さす晴れ間に順調に、ツタを切っていく。煉瓦の研究をしている水野先生ではないので、どれくらい重要な建物かわからないが歴史を感じさせる味のある建物だと思った。

なんとか、ツタ切りも終わり、本来はSLに乗る予定だったがみんなの希望で急ぎよ^(ママ)、地元の温泉に行き、ツタ切りで汚れた体を綺麗にすることになった。夏休みと言うこともあって、家族連れが目立つ温泉で僕らはゆっくりと旅の疲れやツタ切りの汚れを落とした。やはり、風呂は日本の心。なんともいえない気持ちよさがあると改めて、自分が日本人であることを実感した。

こういう、学生のうちでなければ実行しにくいことを経験できたことが大変良かったと思いい、そして自分の人生の中で価値有る財産になったと思う。(1999.2.22受理)

『地名発電所発電建屋清掃ツアーにて』

産業情報学科3D36番 飛渡勝矢

この水野ゼミの8人のメンバーで行われたたいへん貴重な体験についてはここで書くとしても多くて書ききることができないのであえてたくさんある中で特に印象に残ったことをピックアップして書くことにする。

まず一つ目は静岡に出発したときの高速での出来事である。静岡へは僕の車と水野先生の車の二台で行ったのだが僕たちの車は高速道路途中で渋滞に捕まってしまったのだった。その時のことである。僕と同乗していた一人がいきなり、トイレが我慢できなくなったと言ってなんと車を飛び出していったのである。僕は頭がパニックでしまいどうすればいいかわからず、流れのままに車を走らすことしかできなかった。しかしそのとき、はっと後ろを振り返ると、なんと彼が後ろから走ってきているのではないか。まさにあれはその名のとおりではあるが僕には“高速を走る青年”という感じがした。僕はあんな光景を見たのは生まれて初めてだった。と同時にこれからはもうこんな光景は二度と見ないような気もした。とにもかくにも友人が無事に

車に乗車できて僕はほっと胸をなで下ろしたのだった。

二つ目は「五月園」で手揉み茶体験をしたことである。お茶の葉を手でいろんなふうに揉んでいき、それを乾燥させて袋に入れるというものであった。お茶の葉を揉んでいるとき、葉っぱのとてもいい香りが漂ってきた。それはとても気分のいいものであった。ちょうどそのとき、相良牧ノ原で合流した永井氏が僕たちの勇姿をカメラにおさめていた。そのカメラの写し方といったらまるでプロのようになにかすごい迫力を感じた。それから、「五月園」の方の御好意で、“しらす”を食べさせてもらった。僕はその“しらす”があまりにもおいしかったので何杯もおかわりをしてしまったのである。「五月園」の方々にはとてもお世話になった。心から“ありがとう”を言いたいと思った。

三つ目はこのツアーのメインイベント「地名発電所発電建屋清掃」をしたことである。まず、軍手をし、僕は帽子をかぶって鋸を持ってツタを退治しにいざ出陣した。最初はあまりのツタの多さにびっくりしたが、やっているうちにだんだんやりがいがでてきた。みんなもかなり汗をかいていたが一生懸命やっていた。そして細いツタから太いツタまで順々に切っていくと地名発電所の建屋は見る見るきれいになっていった。やはり清掃してそれがきれいになると気持ちがいいものだと思った。その後、みんなでお弁当を食べたのだが、これがまたうまかった。絶品であった。すぐに食べ終わってしまった。そのときの満腹感、流れる汗の感じ、充実感、それらすべてが僕にはさすががしかった。

これらの体験はなかなかできるものではなく、非常に貴重なものだったと思う。このような体験をさせていただいた水野先生とそれに付き添ってくれた永井氏、そしてこの三日間の中でお世話になったすべての方々感謝したい。そしてこの貴重な体験をこれからの僕の生活によりよく生かしていきたいと思う。

(1999.2.25受理)

むすび

以上のように記述してきた通り、今回のボランティア活動に参加した学生諸賢にとっては、通常の大学生活では得がたい体験をすることが出来たもようである。学内のキャンパスライフだけではなく、本稿で報告したような活動も少なからず貴重であろうと考える。日々のデスクワークにはない、ひととき新鮮な感慨を参加者全員が各自で持ったという事実を報告するとともに、生涯学習社会構築に向けての試みとして上記のような手法もあり得る点を述べて本稿のむすびとしたい。

なお、この度の全旅程に参加しているのではあるけれども、本ボランティアに関する「参加者の声」では登場しなかった男子学生が一人いる。それは当時、金沢学院大学経営情報学部経営情報学科3年B組59番であった山崎貴文君である。彼は同じ年に別の企画として実施された京都府舞鶴市における“海の合宿”にも参加しており、自身の体験レポートとしては静岡県の地名ではなく舞鶴での経験を記述して提出したため、本稿では彼の文章を掲載しないこととした。しかし写真—5と写真—6そして写真—9に、活動中の彼の姿を見ることができる。山崎

地域の歴史遺産を大切に



清掃奉仕で 保存訴え！

中川根

地域に残る歴史的遺産の建物を見直し、保存したい。こうして中川根町地名でこのほど、明治時代に建てられた旧地名発電所のツタや下草の刈り取りなどボランティアによる整備作業が行われた。

赤レンガの二階建ての旧

学生らが草刈り 旧地名所

地名発電所は、一九一〇集会所でこの建物の歴史的価値を見直し、保存へのきつかけにしようとする「地名の産業遺産と地域文化」と題に建設。太平洋戦争前後の休止期間を経て六一の建物の見学会も予定され、閉鎖された。今回の整備作業は、建物のレンガ壁一面にツタがはびこり、壁の目地を傷めるなど建物の保存に悪影響を与えているため、同シンポジウムのアピールを兼ねて刈り取りを行った。作業は大きな影響を与えた。このため、中野研究室の学生十人。汗をかきながら、三時間ほどかけてツタや下草をきれいに刈り取った。

レンガ壁をはい渡るツタの刈り取り作業に汗を流すボランティアの学生ら。中川根町の旧地名発電所で

旧地名発電所建物の整備作業を報ずる新聞記事（1998.9.1付「中日新聞」静岡総合版）

図-4 学生ボランティアの記事

君が当ボランティア活動に参加していた事を、ここに明記しておきたい。

末尾ではあるが、このたびの全工程において御力添え・御高配をいただいた方々に紙面を借りて心よりの謝意を表したい。静岡県在住で中部プラント勤務の永井唐九郎氏、大鉄技術サービスの白井昭社長、地名区元区長の板谷幹氏をはじめとする地名住民の皆さん、豊川市の旅館を御紹介下さった天野武弘教諭、愛知県在住で魚津社寺工務店の野口英一朗氏、トヨタ博物館学芸員の西川稔課長、大井川鐵道、志渡呂焼き彦次窯の窯元、手もみ製茶を体験させて下さった五月園、1日目の静岡県の宿舎である金谷町の百楽園、同じく宿舎であるが2泊目の愛知県豊川市の山月、煉瓦造の醸造工場の皆様方ほか、多くの方々の御理解と御協力を賜った。

また本稿をまとめるに際しては様々な参考資料を掲載、活用、参照させていただいた。特に旧地名発電所の実測図に関しては前述した野口氏だけでなく、後藤育代・浅井恵子両氏との共働による実測調査の成果である現状平面図・復原平面図・現状断面図（一部復原）の合計3葉を使用させていただいた。深く感謝申し上げる次第である。なお旧地名発電所の写真は、筆者である水野が撮影した。

さらに、この度のボランティア活動ならびにその直後のシンポジウムに際しては、中部産業遺産研究会と産業考古学会に一方ならぬ御世話になった。最後になってしまったが、両研究会・学会事務局の方々はじめ会員の皆様方に、この場を拝借して心からの謝意を表すものである。

注

注1) 「旧東海紙料地名発電所の煉瓦造建造物に関する調査研究」水野信太郎・野口英一朗・後藤育代・浅井恵子、『産業遺産研究 第5号』産業遺産研究編集委員会、中部産業遺産研究会、1998年5月17日、P-92より転載

注2) 前掲「旧東海紙料地名発電所の煉瓦造建造物に関する調査研究」P-94より転載

注3) 旧地名発電所の着工年月に関しては『大成建設社史』社史発刊準備委員会、大成建設、昭和38年1月14日のP-175、及び同文献の巻末年表P-6に記載されている。

注4) 前掲「旧東海紙料地名発電所の煉瓦造建造物に関する調査研究」P-93より転載

注5) 『シンポジウム「日本の技術史をみる眼」第17回 地名の産業遺産と地域文化 —大井川流域初期の発電所遺構の歴史的価値と地域文化— 講演報告資料集—』シンポジウム「日本の技術史をみる眼」第17回実行委員会、中部産業遺産研究会、1998年9月26日に、書籍としてまとめられている。